空と君と思い出と

波風緋色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空と君と思い出と

【Ｎコード】
Ｎ３８８１Ｆ

【作者名】
波風緋色

【あらすじ】
“忘れないよ、絶対”今の私を支えるのは君との思い出だけ。切なく甘くほろ苦いストーリー…。君にもう一度会えたら笑えるように――。

プロローグ（前書き）

ＨＰの小説にも小説があるので良かったら見てください。

この話はＨＰの小説の過去の話です。

そのままでも楽しめます。

プロローグ

たとえもう会うことがなくても

君は私を覚えていてくれますか？

あの日に見た海を、

忘れないでいてくれますか？

１ｓｔ．初恋

皆で鬼ごっことかを楽しんでいた小学校一年生の春。

私は恋をした。

それは子供ながらの単純な理由だったけど、

その単純な理由で私は恋をしてしまった。

彼はただのどこにでもいるクラスメート。

友達と遊ぶしか興味のなかった私は好きになるまで名前すら知らなかった。

それ以前に私に近寄ろうなんて思う男子はいないだろう。

“雑巾しぼり女”

これが私の幼稚園児時代のあだ名。

誰が付け始めたのかは分からないが“腕を雑巾のようにねじる”という事を私が男子にしてせいだろう。

そんなこんなで知っている人はからかうヤツ以外いなかった。

暴力的な男勝りな女。

それでもいいと思っていた。

――君に出会うまでは。

「大丈夫？」

小学校の給食に慣れてなくて急いで食べて咳き込んでいる私に降り注いだ優しい声。

「…これ、使っていいよ」

差し出された小さな手のひらにのるポケットティッシュ。

駅で配ってそうなただのポケットティッシュ。

だけど初めて心を打たれた。

えくぼを見せる彼の笑顔は幼い私でも分かるように、他の誰よりも輝いていた。

「ありがとう」

緊張していた私が出した精一杯の言葉。

嬉しくて笑う私にまた差し出された手。

意味が分からず彼を見ると彼は優しい笑顔を私にくれた。

『握手』

そう言った彼に応えるようにその手を握り返すと彼も強く握った。

彼の手は、温かくて、

彼の笑顔は日溜まりのように暖かかった――――。

にこっと笑うと彼は友達の方に戻っていく。

この時は胸のドキドキの意味が分からなくてこの気持ちに興味を持った。

何で彼といるとこんなにドキドキするんだろう。

目が合うと嬉しくなるんだろう。

会話が楽しいんだろう。

彼と一緒にいるところころ変わる自分の気持ちが新鮮だった。

一緒に過ごす毎日は幸せすぎて、

私の周りは“好き”で溢れてた。

よく見せる彼の優しい笑顔が愛しい。

子供だからできていた無邪気な関係。

2nd. 初恋

中学校は小学校の隣にあって隣の区の小学校の人もいる新しい共同生活。

でも入学式、私のクラス表に彼の名前はなかった。

初めて離れてしまった教室に焦りを感じる。

私は一組、彼は三組。

教室一個よりも私達の距離はもっと離れてしまった。

正反対のトイレや階段。

違う授業。

“会えなくなる”

そんなことを考えてしまう。

でも彼は廊下の雑巾がけをしている私に自然に声をかけてきてくれた。

「久しぶり」

「掃除してるの？」

「頑張って」

そんなたわいのない言葉が嬉しくて笑みがこぼれる。

そしてまた春が来て私達は二年生になった。

半ば諦めていたクラス替えもまた彼と一緒になった。

二年生の春

嬉しくて嬉しくて、

悲しかった…。

「遠藤隣のクラスの美波ちゃんと付き合ってるって」

信じたくない友達の言葉。

美波ちゃんは隣の区の小学校出身の活発なリーダー気質の子。

「告ったのは美波ちゃんらしいよ」

良かった、遠藤からじゃなくて。

それだけがせめてのの救い。

遠藤も好きってわけじゃないんだ。

同じ教室で一緒に過ごしていても距離は埋められなくて、

彼女がいてもいつも通りの彼に心が痛む。

“美波ちゃんとはどんな話しをするの？”

“私に向けていた笑顔を彼女に見せるの？”

聞きたくても、聞けなくて。

壊れ始めた心は彼の優しさで崩れてく。

そんな私に現実は残酷だ。

「部活行こう」

私は吹奏楽部でトランペットを吹く。

小学校の鼓笛隊の時は音すらでなかったが今では人並みに吹けるようになった。

だから楽器を吹くのは好き。

「湊ちゃん待って」

吹奏楽部は基本音楽室で活動していて一つ上の階にあるので部員は端にある螺旋階段で上がる。

今日も私は友達とその階段を上ろうとした。

「――」

「――」

誰かが階段で話しているらしい、男女の会話みたいなものが耳に入った。

「これ、さっき書いてたの」

「あっ、うん」

美波ちゃんと遠藤だ。

彼女は私達に気付いたのか帰る支度をし始めた。

「んじゃ部活頑張ってね」

顔を赤くして小さく手を振る彼女に彼は私の大好きな笑顔を彼女に向けた。

彼女だけに。

パァーと表情を明るくする彼女の顔を見ても現状を理解することができなかった。

彼は振り返るとやっと私達の存在に気付いたのか少し驚いていた。

「松本達もまたな」

さっき彼女に向けていた笑顔を私に向ける。

「バイバイ遠藤」

ちゃんと笑えてたかな。

小走りに階段をかけ上がった。

振り返ることができなかったのは、

歪んだ視界に彼を映すことができなかったから。

ツラいね。

苦しいね。

「湊ちゃん…」

後ろから聞こえる友達の声すら頭まで届かない。

私が好きなのはその笑顔じゃないよ。

彼女だけに向けた笑顔を私に向けないで。

泣かない

泣くもんか。

いいじゃん、恋ぐらい。

中学生の恋で一生が決まるわけじゃないし。

成績もそこそこ良くて

友達もいて

男子とバカやって、

中学生らしい学校生活でしょ？

ただ好きな人が違う人を好きになっただけだ。

それは、しょうがないことだ。

でも――――。

「ごめん由利、先に部活行ってて」

後ろにいた彼女は“…わかった”と言うと先に部室に向かった。

ごめんなさい。

部活に私情をはさんじゃいけないのは分かってる。

でも少し、少しだけ一人にさせて。

部活に行ったら普段と同じように笑うからさ。

君はどうか知らないで

私がここで君を想って泣いていると知ったら君は欲しい言葉を私にくれるから。

それが嘘でも私信じちゃうから。

…好きなんだよ――――。

3rd. 願い

皆が願い紙に書いている。

今日は七夕。

学校では生徒会が昇降口で短冊に願いを書いてそれを笹の葉に付けるというイベントを毎年行っている。

笹の葉は取り付けられている短冊と共に静かに揺れる。

私の手にも黒い字で願い事を書いた薄いピンク色の短冊が握られている。

私の願いは一つ。

“皆の想いが届きますように”

小さな紙に託した小さな願い。

別に遠藤が美波ちゃんと別れて私の想いが届いて欲しくて書いたわけではない。

ただ皆が私と同じ想いになって欲しくないから。

あんなツラい想いして欲しくなくて…。

「遠藤と美波ちゃん別れたって」

どこかしらからまわってきたウワサ。

私の席に由利が来た。

「今本人に聞いたらやっぱり別れたって」

私は喜びも悲しみも感じなかった。

他人事のように感じてしまう。

だって昨日散々美波ちゃんは彼の話を隣のクラスの子としてたから。

“まさか？”って感じ。

そんな虫の良い話し、信じられなかった。

「なんか少し前から美波ちゃん先輩と付き合ってるらしくて別れたのってあんまり最近の事じゃないみたい」

ってこともしかして昨日美波ちゃんが話していた“彼”はその先輩の話だったの？

抱いてしまった期待に心は踊る。

まだ、好きでいてもいいですか？

また私の心は色付き始めた。

私の中心はいつだって君でした。

「今日生徒会長引きそうだから先帰ってて」

部活の終わった後由利のところに行くとそう言われ一人昇降口に向かった。

人がいない下駄箱で床に響くローファーの音が私を孤独にさせる。

「雨だ…」

こういう淋しい時に限って空は静かに地を濡らす。

深呼吸して傘を差した。

私が一人なのは空のせいじゃないから。

学校の前に流れる川は雨のせいで水面が上がっている。

普段は聴こえない自然の囁きに耳を澄ました。

「松本じゃん」

優しい優しい君の声。

「遠藤…」

横にある彼の顔に心臓が働き始める。

私の隣に彼がいて、一緒に帰ってる。

「今日一人なの？」

…一人なんて久しぶりだからな。

「うん、由利が生徒会だから」

淋しいのがバレないように自然に返す。

何で遠藤は声をかけてきてくれたんだろう。

「松本が淋しそうに見えたから」

口を開く前に彼が言った。

まだ、聞いてないよ？

なんで君には伝わるの？

淋しいって思ってたことも江口には見透かされちゃうんだね。

嬉しくて頬が緩む。

いつもは憂鬱な雨も、好きと思えたんだ…。

掃除はいつもホームルーム前にやる。

でも今日はいつもと違ってワックスやらクレンザーやらが用意されている。

そう、今日は“大掃除”の日。

それぞれが担当のところに行き念入りに掃除をするのだが私の班は階段なのですぐに終わってしまった。

大掃除の時間は決められているのでホームルームまでヒマになる。

由利のところにでも行くか。

立っててもしかたないので由利の掃除場所の被服室に向かった。

被服室は今来週行われる体育祭のスローガンポスターが保管してあった。

「あ、これって…」

書いてあるスローガンは私のだった。

友達と遊び半分で出したスローガン。

“皆の笑顔と君の想いを胸に走り抜け”

ありきたりなのしか浮かばなかったつたない言葉に恥ずかしくなる。

「“皆の笑顔と君の想いを胸に走り抜け”ねぇ」

耳元から聞こえた声に心臓が跳ねる。

「び、びっくりしたぁ」

腕を組んでいる遠藤がいた。

いるならもう少し離れて話してよ。

ドキドキするじゃん。

「松本んとこ掃除終わったの？」

「あ、うん」

そう答えると彼は手に持っていたモップ二本を渡してきた。

「どうせヒマだろ？

手伝って」

わざとらしい笑顔を軽く睨む。

……。

「分かったよ」

しょうがない、惚れたもん負け。

ワックスがついたモップを床につけないように流しに運んだ。

「隣の流しにもう一本あるから」

嬉しそうに笑う顔が可愛いから許してあげよう。

ゴシゴシと水洗いするが全然きれいにならない。

しばらくやっていると江口が来た。

「まだ一本も洗い終わってねぇの？」

目を見開きながら言う彼に苦笑いしかできない。

「ど、努力はしたんだけど…」

そんな私に彼は何も言わず立掛けてあったモップに手を伸ばす。

「こんなの洗ったって事実さえあれば適当でいんだよ」

子悪魔っぽい顔をするとモップを干していなくなった。

は、早く終わらせなきゃ。

私もモップを干すと隣の流しに行った。

でもそこにあるのは干されたモップだけだった。

「遠藤…」

隣に彼の持っていたワックスもあった。

そういう些細な優しさが、私をキュンとさせる。

好き、大好き。

ありがとう――――。

４ｔｈ．海と櫻貝

それから私達は三年生になりまた同じクラスになった。

由利も一緒なのは嬉しかったが三年生ということで皆勉強で忙しくなった。

遠藤と同じクラスでも進路も違い話さなくなった。

近くて、遠い距離。

そんな中三年生最後行事がある。

十二月の中旬に行われる鎌倉班別行動。

遠藤となりたくて、勇気を出してみた。

「え、遠藤。

一緒の班にならない？」

この時の私はすごく変だったと思う。

けど、頑張ってみた。

「いいよ、島田にも言っておく」

返事と一緒に返ってきた笑顔は暖かかった。

言って、よかった。

順調に計画を進めていき、私達は“時代の歴史を体験する”というテーマで行動することになった。

前もって行く場所をインターネットや本を使って調べ、その日一日は班で行動する。

お土産は駄目でおみくじのみ買ってもいい。

今まで進めてきた計画をもとに今日私達は鎌倉に来ていた。

地図を持って調べた目的地まで行くというのは子供みたいだけど楽しかった。

お昼はイタリアンレストラン。

頼んだミートソース、彼は明太子スパゲティだった。

また一つ知った、彼の事。

デザートで頼んだのは皆同じマロンタルト。

正面で顔を見合わせて笑った。

楽しい、楽しいよ。

私は地図を持って、彼はデジカメを持って。

二人で一般道を歩けるなんて夢みたい。

なんか、デートみたい。

思わず頬が緩む。

一通りまわり終えると思ったより時間が残ってしまった。

だったら海行きたかったな。

計画を進めている時見学地のなかに海をいれたら先生に却下された。

授業の一貫として行くから。

でもせっかくなら海に行きたかった。

「海、行くか」

後ろにいる島田と由利にも聞こえるぐらいの大きさで彼は言った。

「でも…」

先生に怒られるんじゃ…。

「海、行きたいんだろ？」

空でさんさんと輝く太陽のような笑顔をくれた。

「うちらはバレないように何か言われたら言っておいてあげるから湊ちゃん遠藤と行ってきなよ」

由利も言ってくれた。

「うん、皆ありがとう」

島田と由利に手を振ると私と遠藤は抜け出した。

海に向かおうと住宅地に入る。

「あ、松本見てみろよ」

上を見ながらデジカメを構える。

カシャ

その音と共に飛んでいく一羽の大きな鳥。

「わぁ」

「たぶん鷹かな」

子供のような顔をしながら満足にうなずく彼。

触れる肩が想いを募らせた。

ずいぶん奥に進んでいくと広がる光景。

灰色に染まった砂浜。

その灰色に染まる青い海。

キラキラ光るその景色を見ながら目を輝かせた。

「綺麗…」

銀色の空と同化している青。

いや、蒼。

感嘆の言葉を呟く私に彼は柔らかく微笑んだ。

「来れて、良かったな」

「そうだ記念に貝殻拾わなきゃ」

一人はしゃいで柔らかい砂浜に足を埋める。

砂浜に駆け込む私の正面で彼もしゃがんだ。

冬の海は風寒かったけど頬は熱かった。

大好きな人と、二人きりで海にいる。

それだけが幸せ過ぎて。

私が笑って君も笑う。

「はい」

目の前に差し出された薄いピンク色の綺麗な貝殻。

「すごいキレイ！」

わぁと受け取ると私の大好きな笑みを浮かべた。

「櫻貝って言って綺麗だけど割れやすくて珍しいんだ」

エッヘンと満足そうに言う彼がすごく可愛かった。

「――――ありがとう」

素直に、言えた一言。

私の手のひらに乗る櫻貝。

太陽に照らされて輝く姿はまるで遠藤の笑顔みたいだった。

本当に、大好き。

今告白したら私達はどうなるのかな。

何か、変わるのかな。

もうこうやって二人でいられなくなっちゃうのかな。

幸せ過ぎて、怖かった。

君を無くしたくなくて。

自分の気持ちを押し殺した。

神様、付き合いたいなんてわがまま言わないからお願い。

もう少し、

もう少しだけ彼の隣にいさせて。

彼の笑顔を私だけにください。

5th. 卒業

櫻貝をもらったあの日から年、受験を越え三ヶ月が過ぎた。

見慣れたブレザーの胸ポケットには赤い造花と“卒業おめでとう”の文字。

それぞれがそれぞれの想いを秘め、今日私達は卒業する。

入場する時に体育館の端を見ると吹奏楽部が演奏していた。

半年前まで一緒にいた後輩が自立して吹いているのを見ると駆け寄りたくなる。

吹けるようになったねって言いたくなる。

去るのは私なのに。

三年間一緒に過ごしてきた仲間が名前を呼ばれ“卒業”していく。

自分の番になり台に上がって先生から“卒業証書”を受け取る。

台から降りる寸前、自分を見つめる体育館にいる人を見渡した。

泣いてるコを見るともらい泣きしそうになる。

毎日顔を会わせてきた仲間と学校で会うことがもうないと思うと目頭が熱くなる。

ゆっくりと台から降りると全てを振りきるように凛として席についた。

…遠藤とも今日で最後なんだ。

台に上がっていく人を見ながら思った。

照明が消えたかと思うとスクリーンに映る“思い出”の字。

浮かんでくる一年生から三年生までの毎日。

その映像には私もいた。

大好きな彼の笑顔もあった。

幸せな日々の結晶。

胸の奥が熱くなって、

その映像が終わると泣いてない人はいないくらい皆号泣だった。

再び流れる吹奏楽の演奏に合わせて歩を進める。

ねぇ遠藤、

私達の未来は明るいかな？

教室に戻り最後のクラス撮影が行われる。

泣き腫らした目を和らげレンズに精一杯の笑顔を浮かべる。

撮影が終わり皆涙を流す中、

遠藤は教卓に立つと言った。

「今まで黙ってたけど、

俺明日からアメリカに行くんだ」

一瞬で静寂に包まれた教室に、彼の声で周囲はざわつき始める。

「ずっと前から決まってたんだ。

中学を卒業したらアメリカにいる親父んとこ行くって」

淋しげに言う彼に言葉をかけられる人は誰もいなかった、

私を含めて。

「二年後、また日本に戻ってくるからそれまで会えないけど…、
今までありがとう」

決意が込められた瞳を見て、皆は笑って接していたけど私にはそれができなかった。

一人一人に握手を求める彼。

とうとう私の番がきた。

差し出された手に初めて話した時の情景が浮かび上がる。

でもあの時と違って、握り返したらもう会えなくなる気がしてなかなか握ることができない。

黙ってうつ向く私に差し出されていた手はいつの間にか背中にあった。

初めて感じる彼の体温。

最後だから、抱き合っている私達に誰もなにも思わなかった。

“最後だから”。

この“最後”を私は感じることができない。

耳元で聴こえる君の音。

悲しげに刻む彼の鼓動に私は耳を澄ます。

悲しいのは私だけじゃない。

一番悲しくて泣きたいのは彼なんだ。

「松本」

愛しい愛しい私を呼ぶ君の声。

「もう一度出会うことができたら、伝えたいことがあるんだ」

優しい彼の響きが私に伝う。

「聞いてくれる？」

その彼の問いに小さく小さく頷いた。

「じゃあ…」

彼は体を離すと再び右手を差し出した。

それに応えるように震える手を堪えながら強く握り返す。

最後に見た彼の笑顔を、私は絶対に忘れないよ。

君が二年後伝えたいことがあるなら、

私もその時伝えることにするね。

――もう一度君とこの空の下で会えるように。

6th. さよなら

さよならをした卒業式の次の日、遠藤は飛行機に乗って旅立った。

嫌な、予感がする。

胸騒ぎが走る中私はテレビを付けた。

お願いだから何も起きてないでいて。

ちらつく画面の中の炎。

ブラウン管の中で流れるあり得ない報道。

“午前9時発のアメリカ行き日本便落下炎上事故”

“生還者ゼロ”と。

チャンネルを変えても、流れているのは飛行機事故を知らせるニュースだけだった。

あり得ない、あり得ない。

確かに午前9時発の便だったけどまさか彼が…そんなこと、あり得るはずがない。

彼と、約束したんだ。

二年後に会おうって。

なのに死んだなんて間違いだ。

彼の乗ってた飛行機じゃない。

遠藤、そうだよね？

その数日後、私は初めて彼の家に行くことになる。

“葬式”というカタチで。

初めて来た彼の家にはすでに私と同じ黒い服を着ている人が数人いた。

学校で数回顔を見たことある彼のお母さんは穏やかに見えたものの、目はついさっきまで泣いていたのか赤く腫れていた。

たくさんのお花の中、色褪せることのない大好きな笑顔が置かれて

いた。

大好きな大好きな、“彼”の笑顔。

別れを告げるかのように線香を立てる人を目で追う。

信じたくなかった。

見たくなかった。

彼がいない現実を

…受け止めたくなかった。

次々に人が通りすがる。

「次は湊の番だよ」

ついこないだまでクラスメートだった友達が私を施す。

言われるがままに線香の匂いがまとわりつく。

彼と私の、さよならの匂い。

写真の中の君は、決して崩れることのない笑顔を浮かべていて、その貼り付けられた笑顔から目を反らすことができない。

運ばれてきたのは白い大きな箱。

そこに眠るようにいる君。

飛行機事故のせいでほとんど包帯で巻かれているその姿は見る程に痛々しかった。

皆は名前の知らない葉っぱをその中に添えていく。

私はただその光景を眺めている。

何も考えることができない。

“彼”がいなくなる事実を認めることができない。

「死んだなんて嘘だよね」

彼の眠る箱に向かって呟く。

「皆私を騙してるだけだよね…？」

ピクリとも動かない冷たい身体。

「『嘘だ』って言ってよ！

『バカだなぁ』って頭を撫でてよ！

『松本』っていつもみたいに君の声で呼んでよ…

私だけに、笑ってよ…――――」

叫ぶ私を誰かが支える。

「“伝えたいこと”があるんでしょ？

私もあるんだよ？

“約束”って言ったじゃん！」

その時初めて、声を出して泣いた。

『大丈夫？』

大丈夫じゃないよ。

また戻ってくるって言ったじゃない。

ここで“さよなら”なんて言わないで。

君がいない今、

こみ上げるこの想いを

誰に伝えればいいの――――？

その日から、私はすること全てに意味を見出せなかった。

大切な人はもういない。

抱きしめてくれた人もこの手を握ってくれた人もいない。

全てがモノクロ。

呼吸をするのだって私には意味がない。

いっそのこと死んだ方がマシだ。

だって彼に会えるから。

あの日のように蒼い空。

真っ白な雲に背伸びしてつかもうとしても届かない。

どうしようもない切なさだけがこの胸を締めつける。

あの日撮った二人の笑顔と綺麗な海の写真と

彼の撮った空に飛んだ一匹の鷹。

君は、あの日の鷹のように空を飛んでいますか？

私はすごく君に会いたいです。

新しい制服に身を包んで新しい学校に馴染んでいく毎日。

そこに君が交じることはもうない。

「明日裏庭に植えてある桜を工事の都合上切り倒します」

朝のホームルームで担任が言った言葉などこの教室にいる人は誰も聞いていないのだろう。

せめて私は覚えておいてあげよう。

自分の意思とは関係無しに死んでしまうイノチを。

彼のように儚く散ってしまう桜を。

『櫻貝って言って綺麗だけど割れやすくて珍しいんだ』

そう言った彼の満足そうな笑顔を思い出す。

遠藤、ホントだね。

イノチも櫻貝みたいに綺麗だけど脆いね。

――すごく、儚いね。

目の前で桜が待っている。

裏庭には一人人がいた。

キャラメル色の髪を持った男の子。

その横顔は淋しげだった。

私のほかにもこの木を見にきた人がいたんだ。

明日いなくなってしまうこの木を。

「綺麗だね」

気づいたら私は口を開いていた。

男の子は私にびっくりしたのか私に視線を向けたまま黙っている。

「この木が明日なくなるなんて思えないな…」

風に舞う花びらを手に取る。

「人間と同じであっけなく終わるなんて…。

儚いね」

掴んだ花びらをもう一度宙に浮かべると花びらは風に吹かれて男の子の手に乗った。

「私、“サクラ”が好きになった」

儚いその姿が美しい。

小さく笑うと私カバンを持って帰った。

何故彼に言ったのかわからないけど、言いたくなったんだ。

私が桜を忘れないと誓ったことを誰かに覚えていて欲しくて。

春の風が吹き抜ける。

日差しを浴びてきらめいていた君の笑顔を焼き付けて。

私は今日を忘れない。

一つの季節が終わっても

その次の季節が終わっても

あの日二人で笑ったことを

抱きしめてくれた君の温もりも

私は絶対に忘れないよ。

いつかこの大空に

二人の軌跡が描かれるまで――。

エピローグ

…本当は君が思い出になる前にこの想いを伝えたかった。

今も手を伸ばせば届く温もりを追いかけてる自分がいる。

大好きな君に会うために。

また誰かと恋に落ちたら、

後悔しないようにするね。

大好きな人に“好き”って伝えられるように。

君と私のようにならないように。

瞳から溢れ出た、

涙の温もりを知ったから。

それぞれの道は分かれても

この日の空は忘れない。

だから約束だよ。

いつかまたこの空の下で会おう。

そしてもう一度

二人の軌跡をたどって行こう。

二人の出逢いを、奇跡にするために。

もう二度と君の手を離さないために。

“ありがとう”って言えるように。

『大丈夫?』

初めて会ったあの日や、

笑いあった日々のように。

また会えること信じてる。

思い出は今も生き続ける。

いつ何が起きても平気なように私は覚えてく。

イノチがなくなってもその存在を覚えてく。

それが私のできる唯一のことだと信じて。

たとえ二年越しの約束が百年、千年越しになっても。

『もう一度出会うことができたら、伝えたいことがあるんだ

聞いてくれる？』

最後に見た君の笑顔と

小さな小さな約束。

――忘れないよ、絶対。

空と君との思い出がまだ胸にあるから――

ＥＮＤ＊。

エピローグ（後書き）

この話の続きは私のＨＰにあります。良かったら来てください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3881f/

空と君と思い出と

2010年10月10日03時54分発行